

昭和三十七年四月二十日 「講演感想記」

「人間啄木を語る」

四月二十日(金)、金田一京助先生をお迎えして「人間啄木を語る」の題で長時間に亘る御講演をお願いした。子供の頃から晩年啄木が死に至るまでの、先生の美しい友情は、先生のお話を直接に聴くことによつて、一そうお互いの心をうつものがあるのである。先生が眼をうるませて薄幸の詩人、人間啄木の真実を話された時聴くものの齊しく感激するところであった。

啄木は兄弟三人の中の一人息子として両親の愛を一身に受け、岩手県洪民村の禅寺に生れ、小さい時から神童と騒がれた秀才であった。白晳紅顔、眼光のするどい啄木は、英気浚刺、「中学校がなんだ」と弱冠十七歳で早くも上京し、文筆をもつて自立せんとしたのであつた。いくら当時でも十七歳の少年の考えるほど、世の中は甘くはなかつた。そのため生活に追われて次から次へと友人、先輩に金を借り、それを返すことが出来ないままにすごしたのである。しかし二十歳の五月には、与謝野鉄幹がつけて呉れた表題「あこがれ」で詩集を出版が出来た。しかしこの時、寺を追われた父母を東京に迎

えて、折角出かけた運命の芽は、生活の嵐の中に翻弄されて、大人五人の生活を細腕に支えることが出来なくて、再び洪民村に帰つたのである。洪民小学校の代用教員として就職するや、これに自己の全力を尽したのであつた。しかし月給八円の代用教員は、いかに子供達の信頼と敬愛を受けても、長くは続かなかつた。

そのかみの神童の名のかなしさよ
ふるさとに来て 泣くはそのこと

かくてついに一家は離散、父の家出後一年にして母がこれを追い、妻と子供を盛岡の実家へ帰し、妹は小樽に去る。かくて彼も函館に旅立つたのである。函館では人の好意で教員生活や文学雑誌編集、新聞社の社外員としての原稿を書き始めて、またここに一家をまとめて、ほつとしたのも僅かに十五日、明治四十年八月二十五日函館の大火で再び漂浪の身となつたのである。

札幌から小樽へ、小樽ではじめて新聞記者の

生活に入ったのであるが、年末にはストライキ事件が起り、啄木は之れに加わつて当時の小樽新報事務長小林寅吉(後の衆議院議員中野「蛭寅」)から殴られるような一幕もあつた。

殴らむといふに殴れとつめよせし

昔の我のいとほしきかな

徹底した無抵抗主義の恐ろしい実演であつた。この幕は啄木のうつろな大笑に終つたのであつたが、歳末のこの騒ぎは、無一文の彼に正月のお雑煮どころか、お米さえもない淋しいものにしたのであつた。ところが突然小樽新報の社長は自から啄木を訪ねて「君を男と見込んで」と前置きして、釧路新聞の編集長と見込まれたのであつた。どこへどう勤めたらいいか、生計の立てようもなかつた彼のところへ、これは愉快な知らせである。これを引き受けた啄木は、釧路に出かけた。釧路では町じゅうからの大歓迎をうけたという。何しろ清らかな顔をして、詩集を出した天才詩人だ、宴席の女どもか

らも大いに歓迎されたのも、むべなるかな。

わが酔ひに心いたためて

うたはざる女ありしがいかなれるや

当時に於ける啄木の思ひ出はいつまでもつきないであろう。特に「小奴」との美しい友情は、啄木ならではと感を深くしたのである。小奴は今もなお釧路の町の近江屋旅館で啄木に對する敬慕の情を抱いて、釧路婦人会の副会長として、釧路短歌会の同人として、立派なおばあさんとなつてゐるとの話であつた。こうした人の言葉を通じて、ありし日の啄木を真実に伝えんとせらるる金田一先生の御努力に對して、塾生と共に感激したところである。

天才詩人啄木は貧乏から逃れることが出来なくて、自から優遇されている釧路を人知れず舟で脱出し、将来小説によつて生活をせんとして再度上京したのであつた。途中雨風のために太平洋上に漂流し、大変な苦しい旅路であつた。横浜に上陸して考えていた落ち着き先は常に思ひのままにならない。結局本郷菊坂の赤心館である金田一先生の下宿に転げ込んだのであつた。

先生は年と共にうらぶれる天才詩人、他の友人達は殆ど絶交して貧乏のどん底にある啄木のために貧しい自分の財布を投げ出してオレ

がお前か、お前がオレか、の一体の生活を続け、啄木の死の瞬間まで、お互に信じあえた友情を刻明に聞かされて、聴衆は水を打つたように静かであつた。幾度か小説をものせんとして終に果し得なかつた彼は、金田一先生の友情と収入とでその生活が続けられたのである。堪え兼ねたあげくの彼が、東京朝日新聞社の佐藤編集長に送つた奇抜な手紙が奇しくも縁となつて、奇抜な面接が行われて就職が決まつた。新聞社に入った彼は、柄にもなく黙々として校正係を続けたのである。英気当るべからずで過して来た神童が、漸く円熟して落ちついて来た。終に彼の才能は認められ、校正の仕事から転じて、社員として活躍することとなつた。漸く自己の力をフルに使えることを眼前にして、不治の病に倒れたのである。

啄木はいろいろの試練の中に育つた。天才主義の彼が毎日校正の仕事に不平も言わず従事出来たことに著しい彼の成長が見られる。釧路時代の編集長の経験を生かして今からという処で、漸く静かな家庭生活の気分これからという処で、長い間の戦いにさいなまれた彼のからは、貧乏を追放することの出来ないままに、金田一先生の友情を感謝しつつ、二十七歳の若さで四月十三日、此の世を去つたのである。そしてすでに五十年である。この薄幸の詩人を終生の友として、人間性の美しさを物語つてうむ

ことのない先生の話は、ますます深さと感銘をまして行くのである。病妻と幼な子を残り、家に貯えもない晩年の啄木は、新しい明日の来ることを信じて、真実一路に生き抜いて来たことは、金田一先生から聞かされて、今日日本の若いまじめな人達から、北は北海道、南は琉球に至るまで、故人を愛慕する声を聞くのもむべなる哉、苦勞するために生れたよう、苦勞のしそんじやないかと気の毒に思われた先生が、今日あの真実の生き方故に若い人達の中に啄木は生きてゐると述べられ、塾生に向つて、不幸をのり越えた啄木に負けないように自から幸福な生活をする様にと希望して、話を結ばれたのである。

(塾理事 望月勲造)

※DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。